

幼児の色の認識について

松村佳子・中田真代
(理科教育教室)

A Study on Children's Knowledge of Color

Keiko Matsumura and Masayo Nakata
(Department of Science Education)

We examine that how many names of color children can answer when they see ten color papers. The results show that the rate of exact answer of this examination is 30%~100% larger than that of twenty years ago. The color that girls like and boys like is the same for 3 or 4 years children but is different for 5 years children. Boys like red and blue and girls like red and pink.

We think that it is useful to know how children recognize colors, as a teacher leads children about natural phenomenon, natural environment, Science and so on.

Key words ; Color paper, children's knowledge

1. はじめに

幼児の発達については、運動能力、技能、精神面、自然認識、知的発達などについて数多くの研究報告がみられる^{1~3)}。しかし、色の認識についての報告例は数少ない。

幼児をとりまく環境には、様々な色をしたものが数多くある。幼児はそれらを見たりさわったりしながら生活している。身のまわりの物や現象に対して様々な観察をしたり、又見たこときいたことなどについて表現をするなかで、色を使ったり色の名前を使ったりする。色の名前は、形や大きさなどを表わす以上に数多く存在するのではないかと考える。そんな中で、幼児が色の名前をどれくらい知っており、色をどのように認識しているかを知ることは、自然教育や環境教育をする上で大いに参考になると考え、調査を行い考察を加えた。

2. 調査方法

色を示すものとしては、幼児にもなじみのある色紙を用いることにした。現行の小学校学習指導要領⁴⁾によると、図画工作で主な色名を覚えることがあげられている。(新指導要領にはこの項がない。) 図画工作の指導書に、小学1年生では基本的色名10種程度を知ればよいとされているので、調査に用いる色の数は10種とした。色名は昭和55年3月発行のある教科書1年生用に、黒、白、灰

色、赤、橙、茶色、黄色、黄緑、緑、青、空色、紫の12色をあげている³⁾ので、それらの中から赤、橙、黄色、黄緑、緑、青、紫、白、茶色の9色と子供たちに親しみがあると思われる桃色（ピンク）を加えて10色を選んだ。

また、色紙では色の名前がいても、身のまわりに見られる物などの色について、色名が正しく言えるかどうかについても調べた。それぞれの色に対応する具体的な物を次のように選んで幼児に示した。赤に対してはサルビアの花、橙—にんじん、黄色—ゆず、黄緑—マキの葉、緑—サルビアの葉、青—ビニール袋（青色）、紫—色水、白—ウサギのぬいぐるみ、桃色—コスモスの花および茶色—どんぐりの実とした。これらは、写真（1—1）～写真（1—3）に示す。また、色の好みを知るために好きな色の名をたずねた。

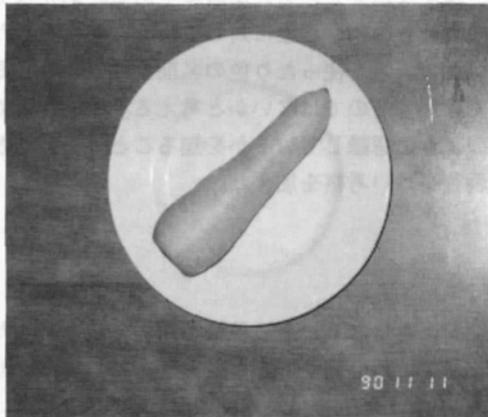
調査は、幼稚園および保育園に通園している、3才児、4才児および5才児の男女を対象にした。調査人数はそれぞれ44名、55名、44名であった。これらの幼児一人ひとりに次のような質問をし、口頭で答えてもらった。

- 1) 色紙（トータルカラー）10色を見せて色の名前をきく。
- 2) それぞれの色に対応する具体物を見せて色の名前をきく。
- 3) 好きな色をきく。

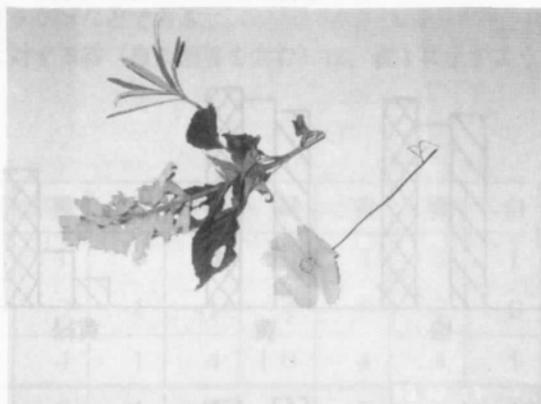
3. 結果と考察

質問1) および2) に対する正解率を図1に示す。橙、白、桃色を除いて、どの色も年令が進むにつれて正解率が高くなっている。桃色に対する正解率は5才児が一番低くなっている。この原因としては、成長するにつれてかなりたくさん色を知るようになり、色に対する自分のイメージも多くなりはっきりとしてきているので、提示した色紙の色が、自分のもつイメージでは他の色に思えたことが考えられる。

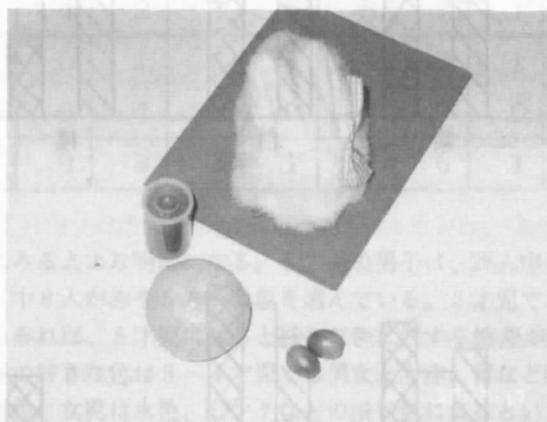
赤、黄色、緑、青、紫に対しては、1969年に同様の調査例³⁾がある。そのときの正解率と今回の色紙に対する調査とを比較すると、今回の結果では、3、4才児の緑、青、紫に対する正解率は約



写真（1—1） 人参



写真(1-2) 上からマキの葉、サルビアの花および葉、コスモスの花



写真(1-3) 上からビニール袋、ウサギのぬいぐるみ、色水、ゆず、どんぐり

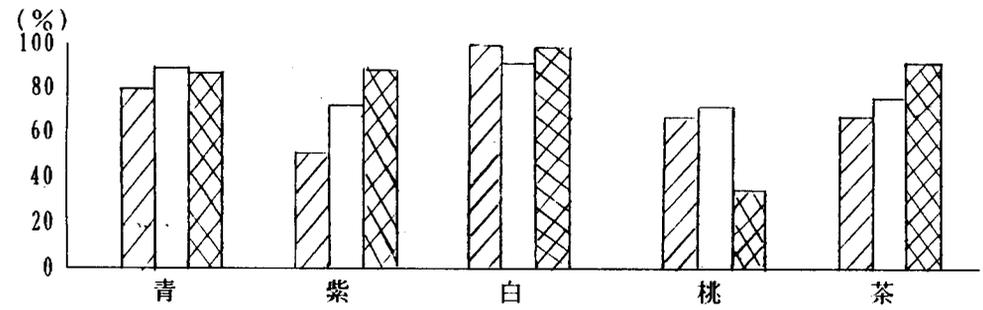
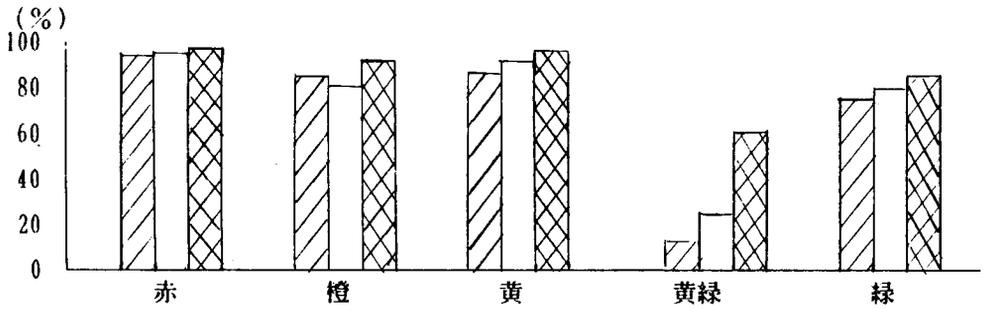
2倍になっており、5才児については、それぞれ30%ほど高くなっている。赤、黄色に対しても、各年令ともそれぞれ10~20%高くなっている。また、色によって正解率に差がみられ、黄緑、紫、茶色に対する認識が他の色と比べて遅れている。B. Berlin & P. Kay⁹⁾の色彩用語の全人類の言語的普遍性によると、色彩用語は、White, Black<Red<Green, Yellow<Blue<Brown<Purple, Orange, Gray のように進化するらしい。幼児の色の認識もこのように発達するのではないかと思える。

具体物に対しては、橙、黄色、黄緑、桃色、茶色で色紙に対するものより正解率が低くなっているのが目立つ。これらは、色紙の色と具体物の色とが少し濃さがちがっていたりするものもあったので、幼児が少しとまどったことも考えられる。しかし、答の中には、“にんじん色”、“どんぐり色”など物の名前が出てきたりして、色名がまだきちんと認識されていないと思える例もあった。

正解率

 3才児 (44名)
  4才児 (55名)
  5才児 (44名)

1) 色紙



2) 具体物

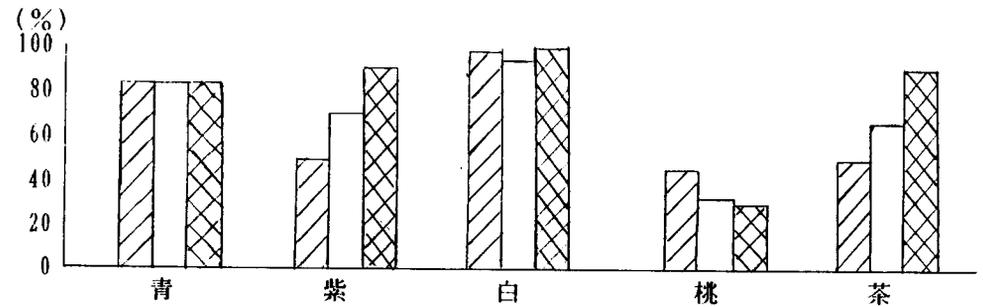
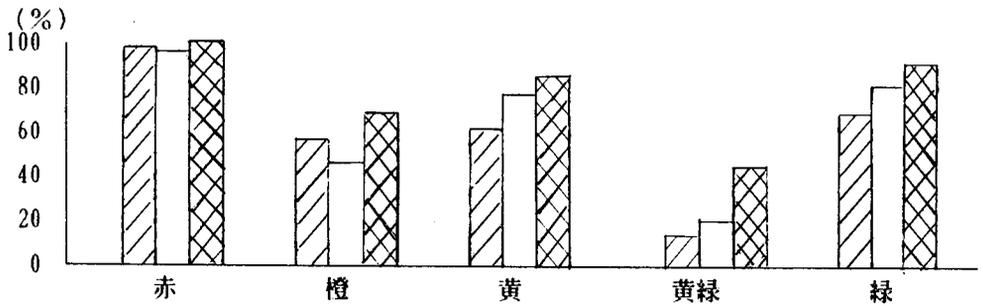


図1

また、色の名前に英語名を言う子もみられた。赤、黄色、緑、紫、茶色に対して、レッド、イエロー、グリーン、パープル、ブラウンなどである。

質問3)の好きな色に対する答(複数回答を含む)は、表1に示すように年令が進むにつれて偏

表1. 好きな色

	赤	橙	黄	黄緑	緑	青	紫	白	桃	茶	計
3才児・男	4	1	0	3	6	4	2	1	3	2	26
女	6	3	1	1	4	0	2	0	6	0	23
計	10	4	1	4	10	4	4	1	9	2	49
4才児・男	10	2	1	3	4	8	4	1	0	2	35
女	10	2	1	0	1	0	3	0	11	0	28
計	20	4	2	3	5	8	7	1	11	2	63
5才児・男	13	0	1	2	1	7	3	1	0	0	28
女	8	0	4	1	0	0	3	0	5	0	21
計	21	0	5	3	1	7	6	1	5	0	49

りがみられる。男女別にみるとより明確になる。5才児の男子は、28人中13人が赤を、7人が青を選び、5才児女子は21人中8人が赤を5人が桃色を選んでいる。3才児では男女ともまんべんなく色を選んでいることからみれば、5才児になると好きな色に対する性差がみられる。このことは、千々岩英彰氏による幼児の好きな色は3~4才児では男女とも赤、青など鮮やかな色であり、5~6才児になると男児は青色、女児は水色、ピンクなどの淡い色になるという報告⁶⁾や、日本人の好きな色の調査⁷⁾(1973年)によと5~6才男児は1位が青、2位が黒、女児は1位が橙、2位が紫の例にみられることと色はちがうが共通性がみられる。また、5才児ぐらいになると、青は男の色、赤やピンクは女の子の色というように意識する傾向がみられるが、これと好きな色とはちがっている。男児は、なぜ赤が好きかという問に対して、赤は強い者の色であり、大将や英雄の色であると答えた。幼児の答は、心理学者が幼児の絵において、赤は愛と喜びを表し、又敵意・攻撃の意を表わす場合もある⁸⁾としていることと一致している。テレビやアニメなどの影響があるとも考えられるが、非常に興味深いことである。

また、江幡潤氏は、「子供なりに好む色、つまりその子なりの色に対する嗜好傾向は家庭における色彩環境、つまり親たちの色彩文化に対する嗜好感覚によって選択されたであろう家庭内の調度品や壁・カーテンなどの室内装飾や衣服等の色彩が総合されてかもしだすところの色彩環境による影響とは無縁なものではない……。」⁹⁾と述べている。男の色、女の色と意識するのは、衣服や持ち物の色が男女でちがいを示すようになるからとも考えられるが、これらはおとながそうさせたもの

であろう。英語の色名が出てくるのも、日常生活の中で使われるカタカナ語（英語）が増加していることを反映しているとみてよいであろう。

4. まとめ

20年前と現代とでは、色に対する幼児の認識もずい分と変わってきていることがわかる。また色の表現も英語（カタカナ語）などがみられ、豊かになってきている。そのような中で、自然現象などを説明したり、表現したりする際、子どもたちの豊かな感性を育てていくためには、指導者も色に対する豊かな認識をもつ必要があると感じた。

また、色の認識はどのようにして形成されるのか。幼児用の絵本に出てくる色との関係なども今後調べていきたいと考えている。

文 献

- 1) 星野春雄、“着想の心理”、黎明書房（1981）
- 2) 植松辰美、“幼稚園児による「動物の足」の表現”、香川大学教育実践研究 第14号（1990）
- 3) 村山貞雄、“幼児の知的発達”、保育学講座9（日本の幼児の精神発達）、日本保育学会著（1970）
- 4) 小学校学習指導要領、文部省（1977）
- 5) 江幡潤、“色名の由来” 東京書籍（1982）p.15より
- 6) 千々岩英彰、“「色型人間」の研究”、福村出版（1990）
- 7) シリーズ色 No.7 “人間と色” リブリオ出版（1989）
- 8) 江幡潤、“色名の由来” p.209より
- 9) 江幡潤、“色名の由来” p.210より